

令和5年度 自己評価計画書

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
---------	-----	----	-------	--------------	------	----

1 3年間を見通した進路指導体制を一層充実させ、早期から生徒に高い志を持たせて、一人一人の進路実現を図る。

①放課後補習を効果的に行うため、生徒に講座内容を提示し、講座を選択させ受講する形式をとる。	進路指導課 各教科 3年学年会	補習内容が合わない生徒には自習できる環境を与えている。これに関しては生徒からも教員からも一定の評価が得られてはいるが、より効果的なものにしていくために、個々に応じた補習課題や添削課題などを与えながら、自ら主体的に学習に取り組む姿勢を育みたい。	【満足度指標(生徒)】 放課後補習は効果的であると思う生徒の割合が	放課後補習は効果的であると思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 放課後補習は効果的かの問に「とても」「どちらかといえば効果的」の割合が85.4% (第2回学習実態調査)
②個人面談を通して生徒理解に努め、3年間を見通した進路指導を実践する。ホーム副担任にも協力を依頼する。	進路指導課 学年会	教員による生徒との個人面談は十分に機能しており、生徒の評価も高い。学習への意欲を高めながら、進路に関する幅広い選択肢を提供していくことが大切である。	【満足度指標(生徒)】 担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であったと思う生徒の割合	担任との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であったと思う生徒の割合が A 98%以上である。 B 95%以上である。 C 90%以上である。 D 90%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 ホーム担任との個人面談について「参考になっている」「少し参考になっている」が 1年 94.8% 2年 96.1% 3年 96.5% 平均 95.7% (第2回学習実態調査)
③志望実現の意識を高め、進路実績の向上を図る。	進路指導課 3年学年会 教務課 各教科	学校推薦型選抜、総合型選抜といった特別選抜には教員全員で関わることができた。その一方で、教員の負担も増加した。より効果的に持続可能なものにしていく対策を構築していきたい。 共通テストでは苦戦が見られ、目標を大きく下回った。難関大学においては、一定の結果は出せたと思うが、中位層の底上げが急務である。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A 50人以上である。 B 45人以上である。 C 40人以上である。 D 40人未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 国公立大学合格者数は39名(現役39)であった。
			【成果指標】 金沢大学と難関大学の合格者数 難関大:10大,東外大,東医歯大,お茶大,筑波大,広島大,慶応大,早稲田大	金沢大学と難関大学の合格者数合計が A 15人以上である。 B 10人以上である。 C 5人以上である。 D 5人未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 名古屋大学1名 北海道大学1名 東北大学1名 金沢大学4名

2 授業と家庭学習の相関を高め、学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。

①中高交流研究授業、校内公開授業など諸研究授業の実践・参観及び研究協議会や研修会を通じて、教師の教科指導法等の技能を高め、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	研究・公開授業の実施など各教科での努力により比較的良好な結果が出ている。生徒の資質や適性を把握し、授業での工夫と改善を今後も地道に続けたい。	【満足度指標(生徒)】 授業において自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激を得られたという生徒の割合	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激を得られたという生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 国語 86% 地公85% 数学 92% 理科92% 保体 87% 英語91% 平均 89% (生徒による授業評価)
②家庭学習時間調査を通して、生徒の学習状況を把握するとともに、学年会と連携して各種課題提出の徹底を図ることにより、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年会 各教科	家庭等で自主的に学習する時間が十分とは言えない。各月に強化週間を設け、全職員で生徒への声かけを行うなどの取組を充実させていきたい。また、ICTツールを活用した効率的な調査方法の確立を目指す。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間	目標時間を達成している生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。 ※ 目標時間 1年生120分、2年生120分、3年生220分	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年 30% 2年 50% 3年 19% 平均 33% (学習時間調査4～12月平均)
		部活動休業日の設定による時間的な余裕に比して、学習時間が確保できていない。授業との相関を意識させながら、課題学習に取り組む環境を整える必要がある。	【満足度指標(生徒)】 家庭での課題学習が効果的であると捉えている生徒の割合	課題学習が、授業での学習の際に効果的であると捉えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年74% 2年76% 平均 75% (第2回学習実態調査)
③土曜補習(セゼミ)を「進路意識の高揚」と「基礎学力の定着」の2本柱で展開する。オンラインを活用する。	教務課 各教科	土曜補習の評価がCからBに上昇した。単に授業の延長線にならないように、オンラインでの配信や大学教授による多岐にわたる分野での模擬授業など、様々な工夫が評価を得たのではないかと。今後も進路を考えさせるような取り組みを継続しながら、学習意欲や学力養成につなげたい。	【満足度指標(生徒)】 土曜補習(セゼミ)は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると思う生徒の割合	土曜補習(セゼミ)は学習意欲の喚起、基礎学力の養成に効果があると考えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年 78% 2年 68% 平均 74% (第2回学習実態調査)

3 生徒一人一台端末や学習支援ツールの効果的な活用のための校内研修を充実させ、探究型学習をはじめとするあらゆる学習活動の進化に努める。

①iGIGAスクール構想実現推進委員会を中心として、組織的・計画的に校内研修を実施する。	教務課 各教科	全校生徒に配付された一人一台端末を学習等に有効活用できるよう、校内研修を随時実施し、教員のICTを活用した指導力の向上に努める必要がある。	【成果指標】 一人一台端末を効果的に活用した学習・進路指導を通して、生徒の学習活動の質の向上につながられていると考える教員の割合	一人一台端末を効果的に活用した学習・進路指導を通して、生徒の学習活動の質の向上につながられていると考える教員の割合 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「できる」52% 「だいたいできる」38% (12月学校自己評価)
②教科の学習をはじめとする諸活動において、適切と考えられる場面を捉え、ICTの活用を図る。	教務課 各学年	生徒がChromebook、Classi、ロイノートなどの新たな学習支援ツールを積極的かつ効果的に活用し、個別最適化された学習活動が行えるようになっていく必要がある。	【満足度指標(生徒)】 学習支援ツールの活用が、自らの学習や進路選択においてとても役立つと考えている生徒の割合	学習支援ツールの活用が、自らの学習や進路選択においてとても役立つと考えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 1年 92% 2年 95% 3年 97% 平均 96%

4 「文武不岐」の精神のもと、生徒個々の人格の陶冶を目指し、部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域との連携に努める。

①部活動の内容を充実させ、活性化を図り、「文武不岐」を目指す。	生徒指導課	部活動の加入率は高いが、真の文武不岐の実現には、部活動の満足度をさらに高める工夫が必要である。	【満足度指標(生徒)】 部活動が、学習活動によい影響を与えていると考える生徒の割合	部活動が、学習活動によい影響を与えていると考える生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「満足」、「どちらかといえば満足」の割合は86.5%
②運動部・文化部ともに成果をあげ、それによってより一層の競技力と意識の向上を目指す。	生徒指導課	総体・総文に参加している部活動数が多いが上位進出の部活動が少なく総合順位も低い。	【成果指標】 県総体総文・新人大会での入賞、またはベスト8に入った回数	総体総文・新人大会での入賞、またはベスト8に入った回数 A 25以上である。 B 20以上である。 C 15以上である。 D 15未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 各種大会の入賞者数は63回
③部活動が地域や中学校との連携を図り、地域に愛される学校づくりを目指す。	生徒指導課	地域のボランティア活動や中学校との合同練習を行っている部活動が増えてきている。さらに地域や中学校との交流を行い、地域から愛される学校を目指したい。	【成果指標】 地域や中学校と連携した活動のべ回数が	地域や中学校と連携した活動のべ回数が A 50以上である。 B 40以上である。 C 30以上である。 D 30未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 20の部活動でのべ53回である。
④いじめのない学校づくりを目指し、共通理解に基づいて、全職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生徒指導課 保健相談課 学年会	いじめの問題への基本姿勢を随時確認し、日常の指導に加え、アンケートや個人面談を通して積極的に情報収集と指導を行っている。	【努力指標】 課題のある生徒への対処で、学年会や教育相談、生徒指導などが迅速かつ十分に連携しているとする教員の割合	迅速かつ十分に連携しているとする教員の割合が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「課題のある生徒への対処で、学年会や教育相談、生徒指導等が十分連携している」と回答した割合が90% (12月教員アンケート)

5 これまでの教育活動の質を保ちつつ、業務の精選・効率化・平準化に努め、持続可能な働き方を進める。

①学校全体や担当する分掌において、業務の精選・効率化に取り組む。	全員	個人で担当する業務に関しては、工夫して精選や効率化を実行することができているが、コロナ対応の変化に伴い、学校全体として業務の再構築を図りながら多忙化の改善につなげる必要がある。	【成果指標】 担当する分掌において、業務の見直しを具体的に図り、実行した教員の割合	担当する分掌において、業務の見直しを具体的に図り、実行した教員の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「分掌で業務の精選や効率化の取組をしている」と回答した割合が97% (12月教員アンケート)
			【満足度指標】 学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合	学校として多忙化改善のための取組が進んでいると感じている教員の割合が A 60%以上である。 B 40%以上である。 C 30%以上である。 D 30%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 「学校全体として多忙化改善の取組が進んでいると思う」と回答した割合が31% (12月教員アンケート)
②部活動運営において、時間を意識した効率的な指導を行う。	部活動顧問	4月時点での計画を年間を通して実行することを目指したい。	【成果指標】 適切な部活動計画を立て、かつ、おおむね実行できたとする教員の割合	適切な計画を立て、かつ、おおむね実行できたとする教員の割合が A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	C、Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 部活動の運営において適切な計画を立て実行している」と回答した割合が90% (12月教員アンケート)